



第19回

春季特別展

## 棟方志功 — 「板画」への挑戦

ピン底のような、ふ厚いメガネ、大きな声で話す津軽弁、人なつっこい笑顔、そして板に顔を近づけて版画を彫る画家といえは？

多くの人が彼の名前を口にするのでしょ。青森出身の画家、棟方志功（1903 - 75）です。

志功作品のなかでも特に人気があるのが、ここにご紹介するような豊富な女性の大首絵。彼は同じような作品を大量に創作していますが、その額には、みな白毫（仏の眉筒にある白い毛）がつけられています。これは彼女たちが神や仏であることを示しています。志功は女性のなかに神性を見いだしたのでしょ。そのことは、版画の面白さを語る志功の言葉でも分かります。

—裸体の、マッパダカの顔の額の上に星をつければ、もう立派な仏様になって仕舞うんだから、ありがたく、忝ないんですね。それがホトケさまというもののなのです。（中略）その額の星がつくと付かないので、タダの素裸の女であったり、ホトケサマに成り切ったりするという大きな世界は、うれしいものです。—

ところで題名の「門世」とは、志功の造語で、東西南北（画中の四方に摺られている文字）が世界への門となっているという意味。別名「安於母



棟方志功「門世の柵」木版に彩色、紙  
（財）棟方志功記念館所蔵 ※禁無断転載

利妃の柵」ともいう、この作品には、志功が画家として広い世界へと進んでゆくとき、つねに彼の心の支えとなっていた故郷青森の亡き母サダへの想いが重ねられているのかもしれない。

※この作品は馬頭広重美術館で開催される春季特別展「棟方志功 — 「板画」への挑戦」（4月20日～6月3日）に出品されます。

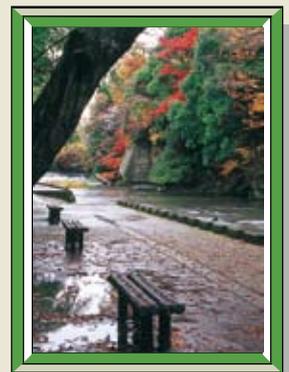
那珂川町馬頭広重美術館 学芸員 津田 卓子

馬頭の自然やまつりなどをテーマに行われた「平成18年度ばとうの観光写真コンテスト」での受賞作品2点をご紹介します。

最優秀賞「バストポイントへ」  
渡部敏彦さん（宇都宮市）



ミニ  
ギャラリー



優秀賞（下野新聞社賞）  
「御前若秋景」 綿引勝春さん（大子町）